二十歳になった日

さくら ももこ

①二十歳の誕生日はひとりで迎えようと決めた。ひとりで決断し、ひとりで人生を切り開いてゆかなければならない年代を迎える気がしていたのだ。チャラチャラとバースデーパーティーを開いて、トリのから揚げなどを食べている場合ではない。

　私はひとり、静岡市内の街角に立ち、まっすぐに続く道をまっすぐに歩いていってみようと考えた。

　五月の空はさわやかで、私は自分が五月に生まれたことを心からうれしく感じていた。どこまでも歩いていけるような気がした。

　ずいぶん歩いた。四十分は歩いたであろう。

②見知らぬ商店街に出ていた。自分の見知らぬ街でも、毎日そこでは人々の生活が営まれていることを、あたりまえだが尊いと思った。全てがいとおしく感じられた。

　古い看板も電柱も学校も、どうしていいかわからないほどありがたかった。公園に、日が差しているだけで泣きたいぐらいうれしい。

　私は公園で少し休むことにした。新緑の葉を付けた木が風で揺れている。子供たちが笑いながら走っている。私はただベンチに座っていた。生きているだけでよかった。そう考えるのではなく感じていた。

（中略）

　そろそろ戻ったほうがよいと思い、駅の方に着きそうな道を選んで歩きだした。ところが歩いても歩いても駅に着かず、なんとなく心細くなってきた。それでも、どうにかなるであろうと思いながら歩き続けてみた。

　帰り道にも古道具屋やらアイスクリーム屋で寄り道をし、三時間ぐらいかかってやっと駅にたどり着いた。もう日は暮れていた。

　家に帰る途中でケーキを買い、七時過ぎに帰宅した。非常に疲れていたが、③これまで味わったことのない充実した気持ちであった。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「二十歳の誕生日はひとりで迎えようと決めた」とあるが、その理由を解答欄に合うように本文中から四十字以上四十五字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□ ～ □□□ から。

(2) ――線②「見知らぬ商店街に出ていた」とあるが、このときの筆者の様子として適当なものを選びなさい。

ア どんな場所でも、毎日人々の生活が営まれているのだというあたりまえのことを、ありがたいことだと感じている。

イ 自分が知らない街で何事もなく生活が営まれ、あらゆるものが光を受けて輝いている様子に、近寄りがたさを感じている。

ウ ずいぶん歩いたことで見知らぬ街にたどり着いてしまい、これからどうしたらよいかわからないような心細さを感じている。

［　　］

(3) ――線③「これまで味わったことのない充実した気持ちであった」とあるが、このときの筆者の心情として適当なものを選びなさい。

ア これまで気づかないところでさまざまな人たちに自分が支えられていたことに対する申し訳なさ。

イ 疲労と不安を覚えながらも、やっとの思いで無事、駅にたどり着くことができたことへの安心感。

ウ 二十代のはじめにひとりで街を歩き、全てのものへのいとおしさを感じることができたうれしさ。

［　　］